広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	イスタンブルにおけるギリシア系住民のノスタルジー ： 『ロクサンドラ』における母と働く女性の描写の差異とギリシア社会での受容
Author(s)	福田, 耕佑
Citation	プロピレア , 30 : 25 - 59
Issue Date	2024-12-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00055885
Right	Copyright (c) 2024 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	

論　文

イスタンブルにおけるギリシア系住民のノスタルジー

――『ロクサンドラ』における母と働く女性の描写の差異とギリシア社会での受容 ――

福田　耕佑
大阪大学大学院人文学研究科特任研究員（常勤）
日本学術振興会特別研究員（PD）

0. はじめに

本稿は、イスタンブルのギリシア人コミュニティ出身で後にアテネに定住した作家であるマリア・ヨルダニドゥの『ロクサンドラ』の作品分析を行い、彼女は祖母の人生を小説化する形で自身の家族と幼少時の追憶を通してイスタンブルでの記憶を残すために本作を執筆したが、なぜこの作品がイスタンブルのギリシア人共同体のみならずギリシア共和国の義務教育教科書にも掲載されるほどにギリシア全体で評価されるようになったのかを論じる。この目的の達成のため、本稿第二章で見るノスタルジー概念を援用し、作品内で描かれた「世代対立」と「女性の役割」を、著者の幼少期の個人的追憶の反映されたロクサンドラとアンナという二人の女性の関係の描写を通して分析する。

第一章では、福田（2023）を援用しつつ小説『ロクサンドラ』について整理する。第二章ではノスタルジーという用語と概念について先行研究に基づいて論じる。第三章ではノスタルジーの観点から『ロクサンドラ』を分析し、特に個人的追憶に基づいた作品に描かかれる社会の変化と女性の位置の変化を分析し、そしてこれらがどのようにイスタンブルのギリシア人にもまた本土のギリシア人にも影響を与え得たのかを論じる。なお、トルコ共和国に位置するイスタンブルはギリシア語では「コンスタンディヌポリ」（Κωνσταντινούπολη）或いは「ポリ」（Πόλη）と呼称されるが、以降本稿では日本語においてこの街を「帝都」と表記する。

1. 『ロクサンドラ』について

本稿で取り上げる『ロクサンドラ』のあらすじや基礎的な情報、並びに作者のマリア・ヨルダニドゥの伝記については福田（2023）を参照されたい。本章では本稿の目的を達成するのに必要な『ロクサンドラ』の基礎情報を整理する。

1-1. 前年度の論文で達成したことと課題として残ったこと

先行する福田（2023）において達成したことは、『ロクサンドラ』において帝都ギリシア人のアイデンティティが、トルコ人と西欧人、そして本土ギリシア人を合わせ鏡に描かれ、自分たちが他者とは異なる明確な自己意識を有するという形で描かれているのを明らかにしたことである。特に広範な意味で同じギリシア人である本土ギリシア人に対して自分たちを異ならしめる重要な要素として描かれたものが、単に自分たちの出身地が異なるということだけでなく、食文化や人間関係など、習慣や生き方の違いといった要素であったということは重要である[1]。逆に、主人公たちが政治的に自分たちの支配者であって異民族であり、そして異教徒でもある人々に囲まれてマイノリティとして暮らしていた帝都に戻った理由は、そこが自分たちの住む故郷であったことに加え、そこに住む住民たちに「習俗や生活の共通性」があったからであった[2]。故に、この作品において描き出された帝都ギリシア人の自己同一性は、本土ギリシア人たちとの差異化という観点で見れば、トルコ人たちとの過去を肯定的な形で含むものであり、政治家や思想家、歴史家たちが所謂「仮想敵」としてのトルコ人というべき存在を想定しつつ形成していったギリシア・ナショナリズムの標準的な自己理解を相対化する可能性を有するものであった[3]。

そして先行する福田（2023）において課題として残っていた点は大きく二つあった。まず一点目は、帝都ギリシア人の東方的な生き方が同じギリシア人であっても帝都ギリシア人と本土ギリシア人を区別する自己意識形成の鍵になっていると論じたが、ロクサンドラの次の世代であるアンナやその親の世代は近代化や西欧化を志向していて東方的な生き方を脱そうとしており、そうであれば『ロクサンドラ』作中においてさえも東方的な生き方という観点が東方的な生き方を共有しない本土ギリシア人と帝都ギリシア人を区別する指標にはならないのではないかという点である。つまり、『ロクサンドラ』作中において帝都ギリシア人の内部には「東方性」を持つ集団と「西方性」を持つ集団が存在するが、なぜ「西方性」を有する集団が内部にいるにもかかわらずそれでも帝都ギリシア人

の有する「東方性」或いは東方的な生き方が帝都ギリシア人と本土ギリシア人を区別する自己意識形成の鍵になっているのかを本稿で説明せねばならない。

また課題の二点目は、上記の「東方性」を有する帝都ギリシア人と「西方性」を有する帝都ギリシア人の間には、福田（2023）で指摘したように「世代対立」と「女性の役割の差異」が描かれていたが[4]、この対立と差異を通して前者が作中における著者が描き出したかった帝都ギリシア人の自己意識として選択されたことを明らかにするという点である。

故に本稿では、上記の二点を解決しつつ、『ロクサンドラ』においては著者自身がモデルになった新世代ではなく、自身の祖母がモデルになったロクサンドラの旧世代が帝都ギリシア人の典型として選ばれ[5]、この著者個人の追憶を通して描かれた旧世代のロクサンドラの描写が帝都ギリシア人や本土ギリシア人全体にも高く評価されるに至った理由を、文学におけるノスタルジー理論を用いて説明する。

1-2. ζχγχ∫ρ、κρЪρЖж、χ3ﾟ

前節の繰り返しになるが、『ロクサンドラ』という作品がギリシア文学史において有する特異性の一つは、帝都ギリシア人を詳しく描写することによって、帝都ギリシア人という自集団の自己意識を他集団とは区別される確固としたものとして描いたことであった。この点は『ロクサンドラ』に先行する作品には存在しなかった視点であり、また後続する作品の帝都ギリシア人描写に影響を与えもした。

例えば『ロクサンドラ』に先行する、帝都を舞台とし且つ帝都ギリシア人が主人公である作品に、ヤニス・プシハリスの『嫉妬』[6]やヨルゴス・テオトカスの『レオニス』[7]が挙げられる。これら二冊の小説の物語は基本的に帝都ギリシア人共同体の内部で完結するものであり[8]、トルコ人をはじめとした異民族の登場人物はほとんど描かれず、帝都ギリシア人の登場人物に影響を与えたりするような重要な役割を担わされることもなく、帝都ギリシア人のアイデンティティに関する観点での重要性が存在しない点で共通している。加えて、特に『嫉妬』は現代ギリシア語を用いて小説を書くことそれ自体が作品執筆の理由になってていたことより明白であるが[9]、帝都ギリシア人の著者が過去に帝都に住んでいた帝都ギリシア人を描いたからと言って、必ずしもそこにノスタルジーが感じられるわけではない。また後者の『レオニス』も著者が注釈で述べているように、帝都で過ごした少年期を文字通りノスタルジーにかられて回想する作品だと述

べているが[10]、自身の帝都ギリシア人のアイデンティティ、難民として財産も持たず本土に来たアイデンティティ、そして新しく都市アテネの住民として生きていこうと決心するアイデンティティが描かれており、第一次世界大戦前にアテネから帝都に戻った『ロクサンドラ』とは逆の結末をたどっている[11]。

また後続する文学作品或いは小説の中で特筆すべきものとしては2017年に刊行されたイラクリス・ミラスの『家族の墓』が挙げられる。作者は帝都で生まれ、帝都ギリシア人共同体で育ち[12]、後にアテネに移住した人物であるが、本作は明確に本土や他の地域に故郷を持つギリシア人のものとは異なる帝都ギリシア人のアイデンティティを探求した作品であり、かつギリシアとトルコの歴史関係の融和を探求した作品である[13]。この作品には『ロクサンドラ』で提示された帝都ギリシア人のアイデンティティの区分が踏襲されており、かつ「間の悪い」などのロクサンドラを彷彿とさせる台詞がパロディーとして使用されているところからも[14]、帝都ギリシア人の作品における文学上の『ロクサンドラ』の色濃い影響が伺われる。

そしてもう一点の特異性として挙げるべき点は、ヨルダニドゥは三人称視点で「集団的記憶」に属するものと「個人的追憶」に属するものを小説の中で書いたが、とりわけ本稿で詳述するようにその「個人的追憶」が帝都ギリシア人と本土ギリシア人というアイデンティティの上で重なる点を持ちつつも異なる両集団に対してノスタルジーを喚起し得たという点である。ヨルダニドゥは『ロクサンドラ』の序文で「これは、忠実な伝記というわけではありません。そしてここに記された特徴の多くは空想に属するものです。ロクサンドラの特徴のような本当のものもあるにはあるのですが、それでもできる限り忠実に描き出そうと努力したものは、歴史上の出来事と時代の習慣であり、そしてその精神に他なりません」と記していた[15]。あくまでもこの作品は「できる限り忠実に描き出そうと努力したものは、歴史上の出来事と時代の習慣であり、そしてその精神に他なりません」に見られるように「集団的記憶」に属するものを描こうと努力した文学作品ではあるが、実際には作中の描写は三人称視点からロクサンドラ一家の生活という「個人的追憶」が中心的に描写され、政治や歴史的出来事といった「集団的記憶」もその個人の生活に関わる形で登場するのであり、決して「個人的追憶」から独立したものではなかった[16]。「個人的追憶」が、作者本人の言う通り客観的記録ではなくて空想と思い出を含めて加工された「作品」である以上、この「個人的追憶」を通して描かれる「集団記憶」の方も客観的記録ではありえないだろう。

確かにマリア・ヨルダニドゥが当時のギリシア国内外のギリシア系知識人や作家たちを代表しているかと言えば無論そうだとは言い難く、ましてや彼女が全ギリシア人を代表しているわけでもないのだが、そうだとしてもここまで見てきたように『ロクサンドラ』という作品とそれが帝都ギリシア人社会を越えたさらに広範なギリシア社会に与えた影響について考えることには一定の意味があろう。次章以下で見ていくように、『ロクサンドラ』が読者の心を掴んだのは「個人的追憶」であるが、それは彼女の「個人的追憶」の描写が人々の生活の中で変化して失われているものの対象と一致していたが故に、人々に影響を与え得たのであった。特にヨルダニドゥの「個人的追憶」の与えた影響は自集団である帝都ギリシア共同体を越えており、マリア・ヨルダニドゥと『ロクサンドラ』は二〇二四年現在のギリシア共和国の中等教育の現代ギリシア文学史の教科書に掲載されるに至り[17]、帝都ギリシアという枠組みを越えてギリシア全体で共有すべき遺産として理解されている。この点こそが本稿の中心的な主題であり、次章以下でこの設問を解く道具としてノスタルジーの概念を援用しつつ詳述していくことになる。

2. ノスタルジー概念について

本章では『ロクサンドラ』で描かれた個人的追憶とそれを背景に描かれた歴史的著述がなぜ異なる集団に対して評価され得たのかを理解するのに有用な概念としてノスタルジーを提示し、それがどのような概念であり、また文学の分析概念として利用され得るのかを先行研究に基づき紹介する。

2-1. 先行研究の紹介

日本における文学研究や心理学研究の領域においては浅井（1991）や大原（1992)、また長峯、外山（2019）などを筆頭にノスタルジー概念を用いた研究は数多く存在する。それらの研究の多くがフレッド・デーヴィスの研究に依拠しているが、まず医学用語として造語されたノスタルジーの用例と概念史に触れつつ、ノスタルジーを個別の文学作品を分析する道具として用いている。その中でも本稿は、デーヴィスの研究を前提にした宮城女子大学人文社会科学研究所編の『ノスタルジーとは何か』に収録された今林の「ノスタルジーという概念を巡って」において提示されたノスタルジーの分類と用法に中心的に依拠する。上記の書籍では、まず第一章で今林がノスタルジー概念を文学分析に用いるのに適した形に整理しており、そして残りの章で日本国内外の文学作品を実際に分

析するという手続きを行っている。同書籍においては今林が提示した概念と枠組みが実際に文学作品の分析に適応可能であり且つ成果が得られることが示されており、本研究でもそこで用いられた概念と枠組みを用いて作品の分析を行うことには妥当性があろう。また、本稿ではそこで提示された概念に加えて、上述の浅井の研究や日本心理学会監修『なつかしさの心理学』で示された研究を用いて補足と整理を行う。

2-2. ノスタルジーについて

今林は、ノスタルジーを「何らかの契機により呼び覚まされた記憶によって特定された時間および（あるいは）空間および（あるいは）人に向けられた個人および（あるいは）集団の心理状態」と定義している[18]。また同書では、人は身近な社会に対して、或いは国家などの大きな社会に対して閉塞感を感じる時、特定の過去を振り返りながら肯定的に懐かしさを感じて自己肯定をするものであり、このようにしてノスタルジーは過去に対して抱くものであるのだが、それは現在との対比の中で行われるものだとしており[19]、本稿ではノスタルジーに対するこの定義と規定に基づいて議論を進める。

今林は分析概念としてのノスタルジーを、その契機を意図せずして自然に得られる「自発的ノスタルジー」と他者からの働きかけによって得られる「操作的ノスタルジー」に大別し、そしてさらにこれの分析観点を「ノスタルジーの契機或いは対象となる空間」と「ノスタルジーの契機或いは対象となる時間」に大別した[20]。更にこの下位区分として、「ノスタルジーにおける時間」に対しては「ノスタルジーの体験が現在から過去の単なる懐古にとどまるものを『消去的ノスタルジー』とし、よりよい未来とも関連させた過去の懐古を『積極的ノスタルジー』」と二つに分類した[21]。「ノスタルジーにおける空間」に関しては、デーヴィスは否定しはしたが[22]、「故郷」という場所がノスタルジーの対象となっていることを認めつつ、ノスタルジーの有する空間性を「地理」、「歴史」、「文化」の三つに分類した上で[23]、この空間の有する三つの要素がノスタルジーの契機或いは対象となる理由を、「不在」、「消滅」、「変貌」の三つにあるとした[24]。本稿ではこのノスタルジーの空間性がその契機となり対象となる三つの理由を大きく「変化」と一つにまとめた上で論じていく。

この今林が提示した分類に対し、本稿の分析では『ロクサンドラ』を通して描かれるマリア・ヨルダニドゥの「個人的追憶」と帝都ギリシア人並びに本土ギリシア人という集団の二つの対立を想定しているが故に、上記の若林の分類に対

してノスタルジーにおける時空に対してさらに以下に紹介する観点からの分析をつけ加えたい。

日本心理学会『なつかしさの心理学』では、なつかしさ或いはノスタルジーに強い連関をもつ記憶と回想に対してダルヴィングが提示した記憶のモデルに基づき、エピソード記憶に基づく、或いは思い出す時に自分を振り返る自己内省的意識を伴う「自伝的懐かしさ」、言い換えると「個人的ノスタルジア」、また意味記憶や知識に関する記憶、そして日常の経験の中で長い年月にわたって獲得された感覚であり同じ文化の人の中で共有される社会的・文化的記憶であって、文化的、歴史的懐かしさを惹起する「文化的懐かしさ」、言い換えると「歴史的ノスタルジア」の二つの分類を提示している[25]。本稿でもこの二つのノスタルジーを分析概念として使用することになるが、自伝的懐かしさに由来する前者を「個人的ノスタルジー」、同じ文化の中で共有される文化的懐かしさに由来する集団的な後者を「歴史的ノスタルジー」と統一して呼称することとする[26]。

『なつかしさの心理学』によると、「個人的ノスタルジー」は自己のアイデンティティの連続性が脅かされた時、そして「歴史的ノスタルジー」は自分が取り入れている生活様式の連続性が脅かされた時、換言すると、今林が定義した「不在」、「消滅」、「変貌」が生じた時、すなわち本稿で言う「変化」が生じる時に喚起されやすいという[27]。フレッド・デーヴィスの「不連続性仮説」（discontinuity hypothesis）に基づき、ノスタルジーが感じられるためには、個人的なものにせよ集団的であるものにせよ従来の生活様式に対する「変化」と不連続をもたらす断絶が必要であり、そもそもその変化が起こる前提としての「連続性」が前提とされなければならないと説明される。『なつかしさの心理学』はこれを「個人的であれ歴史的であれ、変化がなければノスタルジアは感じられない」という表現でまとめている[28]。

今林の提示したノスタルジーと『なつかしさの心理学』で提示されたノスタルジーに基づき、本稿では『ロクサンドラ』におけるノスタルジーを大きく「ヨルダニドゥの個人的ノスタルジー」と「帝都ギリシア人の歴史的ノスタルジー」に分類し、これらをさらに「ノスタルジーの契機と対象としての時空」の観点で分析する。そして、最後に『ロクサンドラ』を通して喚起される「帝都ギリシア人の歴史的ノスタルジー」と「本土ギリシア人のノスタルジー」の差異を確認することで、本稿の問いである「この作品がイスタンブルのギリシア人共同体のみならず、なぜギリシア共和国の義務教育の教科書にも掲載されるほどにギリシア

全体で評価されるようになったのかを明らかにする」ことに取り組むこととする[29]。

3. 『ロクサンドラ』の作品分析とノスタルジー

本章では、『ロクサンドラ』においてマリア・ヨルダニドゥが描いたノスタルジーを分析対象とし、前節で見たノスタルジー概念を用いて分析する。

3-1. 『ロクサンドラ』の「個人的ノスタルジー」

ヨルダニドゥが初めて小説を執筆したのはこの『ロクサンドラ』を書いた 1963 年の 66 歳の時であり、故郷である帝都を離れてから既に長い年月が経っていた。つまりこの作品で表出されるノスタルジーは、時間的にも空間的に「遠く離れた場所（不在）」から発せられるノスタルジーである。失われた、或いは変化の途上にある過去、また失われた、或いは変化の途上にある場所としての帝都が著者のヨルダニドゥに喚起され、また『ロクサンドラ』の執筆につながった要因には大きく以下に述べる二点が考えられる。

まず一点目として、帝都における帝都ギリシア人共同体の流出と縮小という歴史的、社会的要因が挙げられる。帝都のギリシア人共同体は第一次世界大戦期の労働大隊[30]や 1923 年の住民交換、第二世界大戦期の「ヴァルルック」[31]と呼ばれる結果的に少数派を狙い撃つことになった課税制度、またキプロスでの紛争やトルコ･ギリシア間の政治外交紛争に巻き込まれる形で起こった 1955 年の「セプテンヴリアナ」などの弾圧を経て縮小が進んだ[32]。特に 1963 年から 64 年はキプロスで起きた大きな希土間の紛争によってさらに帝都ギリシア人共同体の帝都からの流出が大きく進むことになった。つまり、マリア・ヨルダニドゥが帝都での追憶を『ロクサンドラ』という作品で表現した時代は、現実において帝都における帝都ギリシア人共同体が決定的に失われつつあった時期であり、ヨルダニドゥにとってもこの在りし日の共同体が自分の追憶や想像の中でしか保てなくなってしまっている時代であった。

例えば 1981 年に刊行された、「私たちはセメントと集合住宅の時代に生きている」で始まる自伝的エッセーの『私たちの庭』では、帝都に様々な民族に応じた地区があったにせよ、子供たちは混ざり合って様々な言語を話していたことを回想しつつ、1960 年に娘と帝都を再訪した時のことを記している[33]。そこではブユク・アダ【στην Πρίγκιπο】に向かう船中でギリシア語【ελληνικά】を巧みに話すトルコ人の船長と出会い、彼はどこで学んだのかと尋ねられた時、

―― 帝都ギリシア人の子供たちと道で遊びながら学んだんですよ、と私たちに言った。私たちの家は帝都ギリシア人の地区と接していて、私の初恋だって帝都ギリシア人だったんです。あの子が私を受け入れてくれることはありませんでしたが、私は今でもあの子のことが大好きです[34]。

と応じ、まさに『ロクサンドラ』で描かれた多民族の中の構成要素の一つとして共存する帝都ギリシア人が回想されていた。ここでは「いずれにせよ、あの時代の帝都の子供たちは今日の子供たちよりも幸せだったのだ。老人も今よりも幸せだった【中略】あなただってあの時代には家の中で祖母たちや祖父たち、おばたちに会っていたではないか。あなたが病気になれば、コップ一杯の水を出してくれる人がいた。今では、老人たちは老人たちと養老院にいて、若者たちはサッカー場かディスコ、乳児は乳児園、幼児は幼児園に」と述べて現代の人間関係が希薄になっている様を嘆いている[35]。この帝都訪問は執筆の三年前のことであり、「個人的ノスタルジー」は自己のアイデンティティの連続性が脅かされた時に喚起されやすいという前章で見た言説を踏まえ、変わりゆく帝都をその目で見たことはノスタルジーの喚起と執筆の動機に繋がったのではないかと考えられる。

また二点目として、帝都ギリシア人のみに限らず本土ギリシア人、或いは他の国の人々にも該当する事項であるが、第二次世界大戦と内戦後の現代化と政治的混乱の中での生活様式に大きな変化が表れている時代が要因として挙げられる。老年にさしかかったヨルダニドゥが現在の生き方とは異なる、ますます失われつつある祖母の時代の日常生活にノスタルジーを感じることはごく自然である。例えば上で触れた『私たちの庭』では[36]、集合住宅ばかりが街に増え、「人はアングロ・サクソン的になっ」て「階段やエレベーターで人とすれ違っても挨拶もしない」時代になって「帝都ギリシア人が帝都ギリシア人らしさを失った時代」だと述べている[37]。また上記でも見たように『ロクサンドラ』において描かれた「幸せな」時代では、祖母から孫まで三世代が共に暮らし、異なる街区に住んでいるとしても異民族同士でさえ交流していたのに、今では人々の関係が希薄になって同じ家族であっても老人は老人、若者は若者と世代でばらばらになってしまっている現代をヨルダニドゥは嘆いていた。こういった日常生活が展開され、人間関係がおりなされる住居や環境の変化が「個人的ノスタルジー」を引き起こし、『ロクサンドラ』という作品執筆の動機になったのであろう。

ここまで見てきたように、上記二つの観点で自分の過去が変化の中で失われていたことにより「個人的ノスタルジアは自己のアイデンティティの連続性が脅かされた時に喚起されやすい」とされた条件が十分に満たされている状況にあったことがうかがわれる。以下ではより具体的に、上記のような動機と背景の中で執筆された『ロクサンドラ』に描かれた著者の「個人的ノスタルジー」の内実を分析していこう。

3-1-1. 「個人的ノスタルジー」の「時間的側面」

本作における、現在とは異なる過去がノスタルジーを喚起する過去の「旧き良き時代」として機能するためには、以下で見るように、執筆当時のギリシアや帝都において既に失われていた、祖母ロクサンドラを通して描かれる昔の生活様式と価値観が描かれることが条件として必要であった。そしてこの旧世代の描写が現代の生き方と価値観から失われていることを強調するため、著者自身が反映された孫のアンナという新しい世代に属する女性の生き方と生活様式、そして価値観が描かれ、両者の対比が作中で用いられる。現代では失われた「旧き良き」時代を代表する旧世代のロクサンドラ、そして著者自身であって祖母を個人的に懐かしみ、そして祖母の生き方が既に失われてしまっていることを強調する存在である新世代のアンナは、作中では以下の「世代対立」と「女性の役割の差異」として描かれており、本稿の第一章第一節で見た課題の解決に取り組みたい。

福田（2023）で確認したように「世代対立」という観点は、ロクサンドラやエレニなどの旧世代に属する女性たちを東方に、作中で近代化を象徴するアンナの属する子供たち新世代を西方に位置づけられることで描かれていた。

帝都においてトルコ人や他の東方の人々と「生活と習俗を共にし、交わりを有する存在」として日常生活を通して表現されるロクサンドラの東方性は、本作においては嘲笑の対象にはならないにせよ、「古い」生き方であって喜劇的な効果を担わされるものである。例えば代表的なものとして『ロクサンドラ』第二部三章においてマクロホリからペラに向かう船中の場面が挙げられる。娘たち若い世代は西欧人たちと一緒に船のデッキで男女混じって海風に当たっていたが、ロクサンドラは頭にスカーフを巻いてイスラーム教徒の女性たちと一緒にハレム（女性部屋）にいることを選んだ。この場面の最後は、赤ん坊の世話が十分にできなかったトルコ人の母親にしびれを切らしたロクサンドラが騒動を起こし、

イスラーム教徒の女性たち皆がハレムから出て、騒ぎを聞きつけた娘たちがハレムに駆け付けたところ、中には赤ん坊を世話するロクサンドラが一人でいたという笑劇に終わる[38]。このように、娘たちが近代的・西欧的な選択をした時にロクサンドラが東方的な要素を選択するという対比的な描写がなされる場合は、ロクサンドラは間の抜けた事件を起こす老婆として描かれる場合が多い。

これに対して、福田（2023）で指摘したように作中では「西欧化・近代化」のイデオロギーの中で生活や価値観の西欧化を受け入れることができるギリシア人とこれを受け入れることのできないギリシア人に分かたれていたが、孫のアンナとその両親の世代は、同じ帝都ギリシア人であっても西欧化、或いは近代化の順応しようとする世代であった。ロクサンドラやエレニなどの古い世代は東方的な生と価値観に従って生きていたが、子供たちの世代はアメリカン・スクールに通ったり、生活や価値観の西欧化に順応したりしており、作中の「東方と西方」の対立の中には同じくギリシア人の『世代対立』と『女性の役割』に対する考え方の違いが描き込まれていた[39]。

まず指摘すべきは、確かにオスマン時代のトルコにあって東方的なものを捨てて近代化或いは西欧化を志向していたアンナたち孫や子供といった新世代も帝都ギリシア人がどういう人々であったかを表す重要な要素であるかもしれないが、『ロクサンドラ』においてトルコ人（東方人）とも西欧人（西方人）とも本土ギリシア人とも異なる自分たちが元来有している、或いは有していた独自性を表す主体として選ばれたのは、失われつつあった東方的要素を有するロクサンドラとその旧世代の生き方であった。というのも、まず作中の中にあってさえもロクサンドラは福田（2023）で見たように変化の途上にあったアテネの生活や価値観に馴染むことができず、経済的な事由が最後の引き金となってアテネを出立して故郷の帝都に帰ることになったように、帝都を懐かしんでいた[40]。またとりわけ孫に西欧式の教育を受けさせる意味や効能が全く理解できないロクサンドラに対して、帝都のアメリカン・スクールに通い始めたアンナから手紙が送られてきた場面（第三部十一章）では、

> 一週間後に初めてアンナの手紙の一通目がやって来た。手紙は「おばあちゃん」という言葉で始まり、喧嘩腰の大文字でつづられていた。残りはヒエログリフのようで、ガチョウ、鶏、犬、兎、真ん中には笑っているアンナ。口は耳まで達し、リボンには多大な情熱が込められていた。下には署名があり、追伸で「私を連れ戻しに来ないでね、おばあちゃん。ローストした肉と

かパストゥルマなんて犬が食べてるし、もう送らないで。他の子たちも食べてるような、ミラティエの綺麗な紙に包んだケーキだけ送ってちょうだい」

――まぁ！とロクサンドラは言った。

少ししてもう一度

――まぁ！

この不幸な出来事の後、ロクサンドラは病気になってしまった。病は極めて重かった。あまりにも重かったのでクリオは医者を呼んだ。

医者は立ち去り際に首を振り、老婆が何歳なのかと尋ねた。八十五歳ですか？再び首を振った。「私たちもご婦人ほどの長寿を授かりますように」と言って立ち去ったのだった。食事制限を申し渡した。厳しい食事制限を[41]。

とあるように、作中においても新世代に対して旧世代の習慣は古く失われつつあるものであり、作品の中でもノスタルジーの対象となる条件を満たすものであった。このように、ロクサンドラの生き方は、著者のヨルダニドゥの回想で形成される作中においても近代化と西欧化の中で変化の途上にあった本土のギリシア人と対比しても古い旧世代のものであり、また同じく帝都ギリシア人共同体の内部での対比として変化の途上にあったアンナら新世代に対して古い旧世代であり、失われて行くトルコ人や自分たちのアイデンティティの柱である本土的なギリシア人とは異なる東方的な生活をしていたという自分たちらしさを守ってくれているノスタルジーの対象であった。

確かに作者ヨルダニドゥ自身がモチーフになったアンナ自身の描写も、失われていた帝都での過去を表すものではあったが、それでもノスタルジーと共感を呼び起こす対象として本作で選ばれているのはロクサンドラとその世代の生き方である。つまり、帝都ギリシア人の著者が過去に帝都に住んでいた帝都ギリシア人を描いたからと言って、必ずしもそこにノスタルジーが感じられるわけではないということである。

次に、作中における社会や共同体での「女性の役割」の描写に関して論じよう。ロクサンドラや同世代のエレニは作中の描写で見る限り高度な学校教育を受けておらず、会話は帝都の方言とトルコ語の混ざったものであり、共通語や文語からは距離のある言葉を話している。その証拠の一つとして、文語で書かれた手紙の意味がわからないという描写が第一部第十三章にある[42]。

作中において、ロクサンドラとエレニの属する世代の女性たちの職業は主婦

であった。台所が彼女たちの場所であり、数多くのトルコとギリシアの料理、とりわけギリシア本土では当時馴染みの無かった帝都料理を作り、子供たちや家族の世話をした。衣服やその細かい描写から衣類にも気を配っていたことがわかる。このロクサンドラの手になる豊かな料理の数々は、外国人向けのギリシア語の教材でもギリシアの文化を紹介する読み物として採用され[43]、また帝都に起源をもつギリシア人や帝都ギリシア人は料理を中心に据えたトルコ共和国内でのギリシアの習俗、そして料理を中心に据えた家族史を描いた[44]。こういった書籍に見られるように、現代においても「帝都料理（η Πολίτικη κουζίνα）」は帝都ギリシア人の自分たちのアイデンティティの一つとして今でも重要であるが、この文学における潮流の嚆矢は『ロクサンドラ』であろう。いずれにせよ、『ロクサンドラ』内においてロクサンドラは金銭の問題に関しては夫の連れ子のテオドロスに頼っている描写があり[45]、自分で働いて生活費を働いて稼ぐということはなかった。主婦であり母としてのロクサンドラを通して描かれるものは、典型的で伝統的な女性の社会での役割であり、この「旧き良き」時代を象徴するロクサンドラの在り方が、ノスタルジーを喚起するとともにノスタルジーの対象となっている。

それに対してロクサンドラの子供世代と孫世代の置かれていた社会状況とメンタリティーは、旧世代のものと大きく異なり、むしろヨルダニドゥがロクサンドラ執筆の前に生きていた人生と現実、或いは現状に直結したものである。福田（2023）第四章三節で論じたように、同じ帝都人であってもアンナら新世代は西欧化と近代化を受け入れて変化を受容していっていたが、この西欧化と近代化の受け入れは作中において特に西欧・近代型の教育と職業観、そして西欧人の生活習慣を受け入れて導入していくということを通して描写された。例えば福田（2023）でも引用した第三部九章においては（下線は本稿作成者による）

> どこでこんな話を聞いたのだろう？私たちはどこで生活しているのだろう？<u>ヨーロッパではあらゆる女性が自活していて【ανεξάρτητες】、ギリシア【Ρωμιά】にも文明化の時が来る頃である</u>。嘘は終わりだ。アンナは数年の後には学校に行って少しはフランス語と英語を学び、自分自身と母親を養うため一刻も早く働かねばならない。アレカキスとクロードは翌九月よりアンナが<u>現代的な女性</u>になるようにスクタリのアメリカン・スクールで学ばせようと決心した。
>
> ――<u>唾と鼻くそがなんだってのよ、え？何のことだかちっともわからない</u>。

――母さんは何もわからなくてもいいんだよ。全ては子供のためだから！とアレカキスは言った。スクタリのアメリカン・スクールに通わせるよう手紙を書いている。
ロクサンドラは心の中では「アマン」と言ったのだが、大声で「ふん！」と言っておいた。そしてエパミノンダスの船がいつ帝都に来るのかと何回も訊き始めたのだった[46]。

という場面があるが、『ロクサンドラ』で描かれる近代化され西欧的な価値観を身に着けた文明的な女性になるためには、何よりも「自活」或いは「独立」ということに強調点が置かれた。この女性の経済的独立或いは自立を可能にする条件の整った社会であるという点と女性の自活という点は、著者のマリア・ヨルダニドゥが実際に生きた人生にとっても重要であり、確かにヨルダニドゥ自身は結婚して母として子育てにも携わったが、旧来の伝統的な主婦という枠組みの中に留まらず、作中のロクサンドラにはできなかったような左派知識人のサークルに出入りして交流し、また戦前よりソヴィエト大使館で勤務するなど自身の生計を自分で立てたのだった[47]。

この職業人或いは自活を体現する者としてのヨルダニドゥ自身の意識は『ロクサンドラ』の上記の引用においてだけでなく、実際に『ロクサンドラ』の続編でアンナが主人公である『コーカサスでの休暇』においても見られた。作中においてロシアに到着したアンナは、第一次世界大戦の影響でトルコに帰ることができなくなって経済的に困窮してしまうことになり、おじの妻のマダム・クロードやマダム・フローの勧めによってイギリス人のミス・エニ・ドラパースになりきってロシア人の子弟に英語を教えて現地での生計を一人で立てていくことになる。この時、アメリカン・スクールに通ったとはいえイギリス人でもミス・エニ・ドラパースでもないのでロシア人にイギリス人のふりをして英語教師をすることを断ろうとするのだが、マダム・フローは日々のパンを稼ぐためにはアンナは中国人にでもなれるはずであり、経済的独立を手にするためにはイギリス人にならねばならないと諭す。実際アンナはイギリス人になりきって独立した生計を立てていく[48]。上記の話は自分の生涯を反映したものであったとしても創作であり、実際にコーカサスの親類のもとを訪れて第一次世界大戦の影響で帰国ができなくなって現地の学校に通ったことは史実ではあるが、そうだとしても『コーカサスでの休暇』の休暇で描かれたように一人で国外旅行をしたわけでもなければ、ましてやイギリス人になりすまして英語教師として自活して生計

を立てたわけでもない。この社会の中で働く女性という観点と「自活」という点が作中でアンナが義務教育の年齢に達する以前より意識されていること、そして自作品の中でも創作を通して実際にまだ子供の年齢で英語教師として経済的な自活を達成したという点から見られるように、加えてヨルダニドゥ自身が生涯、自立して生きたように、創作の中でも重要な点であったことがうかがわれる。

ヨルダニドゥ個人はアンナを通し自分自身の職業人としての人生の基礎に繋がる幼少時代を懐かしく回想し、社会全体の変化やトルコやギリシアの社会における女性の立場の変化に合わせて働き経済的自活を達成した女性の表象を描いたという点は重要である。そうだとしても、この作品の名前と主役は祖母の『ロクサンドラ』であり、著者本人にとっても職業人としての生き方は、失われ変化した過去ではなく、生きるべき今に直結したものであった。つまり、当然のことながらロクサンドラの旧来の東方的な生き方は『ロクサンドラ』作中においてさえも失われつつあるものであり、また作中の外の本作執筆当時の世界ではなおさら失われているものなのだから、ノスタルジーの対象はマリア・ヨルダニドゥ自身の過去やそれを反映したアンナではなく、自分の記憶の中の祖母その人である。

ここまで、旧世代と新世代の間には東西性の対比を下敷きにした上で「世代対立」と「女性の役割の差異」が描かれていることを論じたが、上記で見たように著者が『ロクサンドラ』の中で帝都ギリシア人の自己意識表出の主体として、そしてノスタルジーの対象として選んだのは祖母ロクサンドラの属する旧世代であり、下記で見るように『ロクサンドラ』では、確かに旧世代のロクサンドラには間の抜けた事件を起こす老婆だという喜劇的効果を狙った描写がなされはするも、近代化と西欧化を達成した新世代を持ち上げることで旧世代を東方的で時代遅れな世代としてこき下ろしたり低い評価を与えたりすることは決してなかった。

先ほど見た帝都のアメリカン・スクールに通い始めたアンナがロクサンドラに宛てた、ロクサンドラとアンナを通して新旧の世代の対立を描いた「食事制限を申し渡した。厳しい食事制限を」で終わる第三部十一章での手紙の場面は以下のように続く。

> ずっと耳が聞こえずささやき声のようにしか聞こえていなかったのにロクサンドラは義理の息子の声が聞こえた時に心の中で「アマン！ あんた分か

ってるの？ 私は死ぬんだよ！」と言った。

瞳を閉じて呻き始めた。

台所から香りが漂ってきた。ロクサンドラは「肉を料理してるんだ」と考えて力を出して唸ったのだった。

――お母さん……

――む！ む！ 子供！

――早くあの子を連れて来て！

クリオは服を着てアンナを連れ戻しに行った。

今や何が起ころうとしているのだろう？ ラハノドルマデスの香りが家中に充満した。

――む！ む！

――お母さん……

――報せを送る手は止めないで、アガト！

――お母さん……。何が欲しいの？ お母さんから祝福を与えるなら、ディミトラキスとタナシオスを連れて来ようか？

――む！ む！

ロクサンドラは何を言いたいのだろうか？「ラハノドルマデスが食べたいの」と言いたいのだろうか？

――死に装束、私の死に装束は布束の中にあるの……

アガトは泣き声を上げ、客間に走って行った。

マノリオスは客間のソファーに腰かけ、ルグルが風を送ってやっていた。

――あなたは来てはいけなかった。だって、あなたの心には耐えられないんだから。

スクタリからクリオが帰って来て子供を連れて来る前に、ロクサンドラは余りの空腹で絶望していたので、司祭に痛悔と領聖を求めた[49]。

アンナの手紙の後でロクサンドラは死に装束を求めたり司祭を呼んだりするなどいよいよ臨終を迎えようとしていたが、その中でもロクサンドラはアンナを求め、そして死の床にあってもそのアンナが否定した昔ながらの帝都の料理はやはり描かれる。続く場面では、

ドン！ ドン！ ドン！ 十一時だった。皆眠っていた。ロクサンドラの部屋で起きていたのは猫だけだった。猫と他の誰か一人がロクサンドラの上に身

を乗り出す。

――おばあちゃん！

――アンナじゃない！

――何かほしいものはない？

――ラハノドルマデスよ！ 私はね、餓死しかけてて、皆が私の死に装束を切ってやろうと集まってるのよ！

真夜中頃、ロクサンドラがいなくなった。アガトが目を覚まして何が起こっているのか見に行くと、ロクサンドラがベッドにいなかったのだ。

緊急事態発生！

ロクサンドラがいなくなってしまった。窓から落ちていなかったらいいんだけど？トイレに行っただけなのだろうか？ ベッドの下？ 台所？ それとも食品貯蔵庫？

食品貯蔵庫だ！

石鹸の木箱の上に寝巻のまま裸足で座り、ロクサンドラは有り余るラハノドルマデスの入った鍋を膝の上に置いていた。

エパミノンダスが床に跪いてイワシの箱を開ける。

アンナは手にビスケットの大きな箱を持ち、猫が一段目の棚に座って体を舐めている。

皆が「あああああ！」と言い、エパミノンダスがもう少しすれば危機も過ぎ去って病人もすぐに食事を摂るに違いないと説明したので、十字を描いて神の光栄を讃えた。

ロクサンドラは努めて微笑んでいるが、口は食べ物で一杯で、目だけがずる賢そうに笑っていた。

――ふん、お腹が減って仕方なかったのよ、と口を半分ほど開けて言った。この私が腹の減ったまま死ぬわけがないじゃないか[50]！

という、死に瀕していたはずの病床から抜け出し、「『ふん、お腹が減って仕方なかったのよ』、と口を半分ほど開けて言った。『この私が腹の減ったまま死ぬわけがないじゃないか』」という、ロクサンドラがいなくなってしまったのは腹が減って食べ物を求めに行っていたという喜劇的な顛末だが、この場面でも昔ながらのギリシア料理のラハノドルマデス（ロールキャベツ）を持ったロクサンドラと西欧菓子のビスケットの箱をもったアンナと対比される形で、このシーンの滑稽さと郷愁が更に引き立てられる。アンナや新世代は確かにその変化の歩み

を止めることはなく、過去の世代の生き方に立ち返ることはなかったが、本作品においてロクサンドラや昔ながらの帝都は決して否定されるものではなく、ロクサンドラはラハノドルマデスと共に死なずに生き、むしろ伝統や昔のものは死んで耐えてしまうことなく次世代に生きる力を与えてくれるものなのだと訴えかけてくるかのようである。ここでもロクサンドラの喜劇的なふるまいは、おかしみを感じる要素ではあるが、決して前近代的で迷信的な老婆だとして皮肉や嘲笑の対象にされているわけではない。

むしろ本作においてロクサンドラがアンナに残したものは、第三部六章で描かれるように（下線は本稿作成者による）、

> トゥルコリマノ【本稿作成者：アテネの地名】の漁師たちからアンナは鉤や銛、油汚れや砂州というのが何なのかを学んだ。魚の名前を学び、前の晩から冬の北西風が吹いている時には、夜は夏の北東風が吹くということも知った。野菜がいくらであり、ラハノドルマデスを作るのに何オカの野菜が必要で、八百屋にはいくらの心づけを与えるべきなのかも学んだ。どうやってヤランジュ・ドルマを巻き、ズッキーニの詰め物をつくるのかも知った。靴下の破れを繕い、古着を細々と切って、布やカバーを作るために美しく組み合わせる術も学んだ。ここ最近は祖母にレースの装飾の編み方を教えてもらった。
>
> アンナは祖母から他のこと、学校でもらった柘榴と菫で教科書には載っていないことも学んだのだった。どうやってそれぞれのものを味わうべきか、特にオリーヴの実や魚卵をどう味わうべきなのかを学んだ。雨と日差しも。生きること、見ることと聞くことを喜ぶことも学んだ。愛することを学んだのだった。
>
> 他の多くのこともアンナは祖母から学び、そうやって冬が過ぎた[51]。

とされるように、本作における近代化と欧米化の象徴の一つである学校では教えられないロクサンドラの旧き良き生き方が「愛すること」だと表現されており、ロクサンドラの生き方に深い愛情と郷愁のまなざしが向けられている。繰り返しにはなるが、『ロクサンドラ』作中においても次作の『コーカサスでの休暇』においてもアンナは決して旧世代の生き方に戻ることはなく、自分の新しい世代での生き方を変えることはなかったが、この古い世代のロクサンドラの生き方や感性を古い物、乗り越えねばならない旧習だとして否定することは決して

なく、むしろ祖母ロクサンドラと彼女が象徴するものは「愛すること」でありノスタルジーの対象であった。

自伝的エッセーの『私たちの中庭』においては「【ロクサンドラの時代の】帝都において女性たちは、ここ自由なるギリシアのように夫に従属してはいなかったし[52]」、「あの時代では女性たちは家事を隷従とはみなしていなかった。奴隷は、真夜中に起きてパンを稼ぐために家を出ていた夫たちの方で」あり、「女性たちは一日中主人や支配者として家に留まって、望むがままに自分の生活を調節する自由があった[53]」と昔の主婦としての生活を回想している。

だが、作家ヨルダニドゥは祖母と自分の子供時代という二つの世代と第一次世界大戦を経験し、「自分が自由な人間でいたければ経済的に自立していなければならない時代になった」と、彼女自身が生きた職業人としての生き方は外的な要因による変化で起こったと述懐している[54]。しかし、この変化に順応したおかげで「私は生涯の全てにおいて自分の独立を維持するために苦闘し、そして実際に維持した」のであり、「こうして老いた後私は生計を立てるということから解放され、喜ばしい子供時代に戻って水を得た魚のようになった」と自分の生涯を振り返っている。ここでも戻るべき場所として選ばれているのはロクサンドラのような生き方にせよアンナのような生き方にせよ子供時代の方であり、在りし日に過ごした帝都であった。

前節で確認したように、今林は「ノスタルジーにおける時間」に対して「ノスタルジーの体験が現在から過去の単なる懐古にとどまるものを『消去的ノスタルジー』とし、よりよい未来とも関連させた過去の懐古を『積極的ノスタルジー』」の二つに分類していた。『ロクサンドラ』で描かれた「個人的ノスタルジー」は、著者自身が実際に歩んできた人生であって現代の価値観にも通じる、近代化西欧化を経たアンナを通して描かれた過去ではなく、近代化や西欧化以前の生活様式と価値観を含む旧世代のロクサンドラがノスタルジーの対象であった。

作中での旧世代ロクサンドラの描写は、確かに新世代アンナたちとの描写と比較して帝都ギリシア人の自己同一性を表象する機能を担わされ、このロクサンドラの描写は失われた過去を回顧させるノスタルジーであったが、作中と次作において未来を生きていったのはアンナであり、ロクサンドラら旧世代の描写を通して喚起されるノスタルジーは今林が「ノスタルジーの体験が現在から過去の単なる懐古にとどまるものを『消去的ノスタルジー』」と定義したのに該当するだろう。そして（よりよい）未来とも関連させた過去の懐古は、先述の通り近代化を経て社会で自活する術を身に着け実践していったアンナを通してな

されたが、これは本作において中心的に回顧されるノスタルジーではないことから、「積極的ノスタルジー」と言うことはできないだろう。本作を執筆した段階でヨルダニドゥは退職しており、ヨルダニドゥの「個人的ノスタルジー」の観点では、自分自身の職業人としての将来を見据えたうえで過去を回想するつもりも必要も無かったのかもしれない。

3-1-2 「個人的ノスタルジー」の「空間的側面」

『ロクサンドラ』における「個人的ノスタルジー」の「空間的側面」として、ノスタルジーの対象となるのは何よりもまず故郷としての帝都である。さらに詳細に見ると、ロクサンドラが過ごしていた帝都近郊のマクロホリという非都市部と、ペラやタターヴラという帝都の中の中心的な場所であった。

福田（2023）で確認したように、帝都のおけるこれらの場所は「スタヴロドロミ[55]にはトルコ人も誰一人いなかった――ギリシア【Ρωμιοσύνη】なのだから[56]」と表現されたり、「ボスポロスのヨーロッパ側の海岸にはギリシア人と一般にヨーロッパ人が居住していた――メガ・レマ、ブユック・デレ、テラピア、これら全ての郊外はヨーロッパに似ていた。アジア側の海岸は東方【Ανατολή】であった【中略】金角湾の中にあったファナリは、未だギリシア的知性の中心であり続けていたが、初期頃の絢爛は失われていた」と表現されており、帝都内部において完全に帝都ギリシア人の土地として描かれている。また、タターヴラについても「タターヴラは、ギリシア人が人口の百％を占めていた帝都唯一の郊外であった。あなたがトルコ人にどれほど懇願してみたところで、タターヴラに足を踏み入れようとすることもできなかっただろう」と同じように文化的にも「帝都ギリシア」だと描写されているが、より重要な点として「あらゆる旧い習慣が保たれていた」と書かれている[57]。作中で描かれる帝都は、古代ギリシア史における建都の記憶や中世ビザンツ史で描かれるギリシア正教の本山アヤ・ソフィアやビザンツ皇帝たちの記憶、そして十九世紀から二十世紀にかけてギリシア王国領の領土拡張を支えたイデオロギーである「メガリ・イデア」でイメージされた歴史的な帝都ではなく、実際に自分たちの先祖の墓があり、親類や家族、また友人たちや自分自身が生きていた具象的な故郷であった。そしてこの具象的な故郷において空間的に描写されるものは、懐かしい日常生活の展開されていた昔ながらの家屋や街並みであり、「シマンドロ」という正教徒たちを礼拝に招く昔の楽器の描写[58]やハマムに入る描写[59]などの昔の習慣と日常であった。『私たちの庭』では画一的で人と人との関わりを困難にする集合住宅に難色を示し、『ロクサン

ドラ』においては非都市部のマクロホリにおいても都市部のペラにおいても細かく家屋と住まいの様子が描写されていたように、『私たちの庭』でもタターヴラのおばの家を訪れた際に「空間的ノスタルジー」の対象となる帝都の昔ながらの街並みと家の調度や台所内部、そして昔ながらの社交の様子を回想して細かく描写している[60]。

この帝都への個人的なノスタルジーは作中の中でも表現されており、第三部においてアテネ近郊のピレアスに引っ越した後も、結局はアテネが自分たちのいるべき場所ではなく、帝都こそが自分たちのいるべき場所だったのだと懐かしんで帰った重要なシーンが挙げられる。たとえパルテノン神殿といった古代ギリシアの記憶があったとしても、ロクサンドラたちにはアテネの人も食べ物も習慣も自分たちの故郷にはなりえなかった。「ノスタルジー」と「変化」という観点で作中に表現される個人的ノスタルジーを見ると、アテネへの引っ越しによって帝都を空間的に失うという変化が契機となって帝都へのノスタルジーが始まり、結局はそのノスタルジーの対象としての帝都に戻ったのであった。

自伝的エッセーの『私たちの中庭』においては、『ロクサンドラ』でロクサンドラたちがアテネのピレアスに引っ越してきたように、自分たちがピレアスに引っ越して来た時のことについて書かれてある箇所がある。そこで描かれた家は、セメントや集合住宅といった画一的で現代的な住居ではなく、中庭を備えた家であった[61]。ヨルダニドゥは画一的なセメントでつくられた集合住宅で誰が誰かわからないような人間関係が希薄な中で暮らしているが故に「おそらく今日の女性たちは自分の家が嫌いなのだ」と思っていたが[62]、この「中庭」という場所は隣人や家族が集う人間関係と交流を連想させる場所である。後に『ロクサンドラ』を読んだ娘の友人が、著者の娘と友人であることに感激してヨルダニドゥに会いに来る場面が描かれるが、こうしてこの中庭で『ロクサンドラ』のことを話し合い、皆が笑い合い、心を打ち溶け合い、暖かな交流が生まれることになった。この場面をヨルダニドゥは「中庭にいた集合住宅の住民たちはアングロ・サクソン流を捨て去っていったのだった。人々は、再び帝都ギリシア人になった。人の紹介がなくとも、挨拶をするようになった」として描いた[63]。ここに見られるように、アテネのピレアスで展開された「アングロ・サクソン流」或いは西欧や近代とは異なる温かい交流と交わりを「人々は、再び帝都ギリシア人になった」と描写している。『ロクサンドラ』ではロクサンドラは実際にアテネを離れて帝都に帰ったが、『私たちの中庭』ではアテネの中庭を人々の交流の場としての『帝都』に変えていた。つまり、人間関係の希薄さとは無縁な「中庭」や温かみのあ

る人々の交流はアテネにではなく帝都に結びつけられ、帝都という場所がノスタルジーの対象となっている。

著者のヨルダニドゥ自身は生涯において帝都に戻って居住することは無く（不在）、また自分の境遇と同じように 1955 年以降さらに多くの帝都ギリシア人が故郷の帝都を離れ、帝都における帝都ギリシア人共同体は消滅の危機、或いは大きく縮小していっていた（消滅と変貌）。本稿第一章二節で引用したように、ヨルダニドゥ自身が『ロクサンドラ』の序文で「これは、忠実な伝記というわけではありません。そしてここに記された特徴の多くは空想に属するものです。ロクサンドラの特徴のような本当のものもあるにはあるのですが、それでもできる限り忠実に描き出そうと努力したものは、歴史上の出来事と時代の習慣であり、そしてその精神に他なりません」と記していたように、執筆の経緯は何よりも個人的に失われてしまった故郷を記録することであり、これは少なくともヨルダニドゥ個人にとって故郷の喪失が切実に感じられるように変化していたことが執筆の動機の一つであり、「個人的ノスタルジー」が喚起されるのは自己のアイデンティティの連続性が脅かされた時という条件が当てはまるだろう。空間という観点で見た個人的にも歴史的（つまり集団的）にも故郷である帝都という場所の喪失、そして前節の時間という観点で見た生活と女性の社会での役割に対する近代化と西欧化を経た生活様式の変化が結びついて帝都のノスタルジーへの契機となり、そして空間として個人の追憶を通して描かれる「あらゆる旧い習慣が保たれていた」東方的な生活の保たれた帝都、時間的にはこの生活様式を体現したロクサンドラとその生き方、そしてこのロクサンドラの生きた帝都ギリシア人共同体と帝都が、そのノスタルジーの対象となったのであった。

ここまで時間と空間の両観点から『ロクサンドラ』に表現された「個人的ノスタルジー」を分析したが、次節ではヨルダニドゥ自身の職業人としての人生とそれに対比される形で祖母の追憶を文学を通して描いた描写、そして第二次世界大戦以降の都市化や生活の変化とこれに対して帝都をノスタルジーをもって描いた描写が、帝都ギリシア人全体の生活の変化や故郷の喪失と共鳴して彼らの集団的なノスタルジーをも喚起したことを見ていく。そして、本土ギリシア人にとっても、より大きな範疇で見たギリシア人の昔の生活様式をノスタルジーを喚起させる形で描いた点で、本土ギリシア人の生活様式の変化という観点で彼らのノスタルジーを喚起するものでもあり、「歴史的ノスタルジー」を連想させる共通性の高いものであったことを論じていきたい。

3-2 『ロクサンドラ』における「歴史的ノスタルジー」

ここでは前節までに見た、『ロクサンドラ』に描かれた「個人的ノスタルジー」に基づいて本作品に現れる「歴史的ノスタルジー」を分析する。この「歴史的ノスタルジー」の分析を通し、なぜヨルダニドゥ個人の追憶と祖母との記憶をもとに創作した作品が帝都ギリシア人と本土ギリシア人のノスタルジーを喚起するに至ったのかを考察したい。

まずヨルダニドゥのように帝都外に去って異なる地に定住した帝都ギリシア人にとっても、帝都は自分たちから失われ「喪失」した土地であり、仮に帰郷することがあったとしても帝都のギリシア人共同体は縮小していて「変貌」しており、この「変化」によってノスタルジーを喚起させ且つノスタルジーの対象となりうる場所である。また帝都内に残った帝都ギリシア人にとっても、多くの同胞が帝都外に流出していて『ロクサンドラ』に描かれたような「ここはギリシアなのだから」と書くことができたほどの帝都ギリシア人の影響力は存在せず、やはり縮小していて「変貌」しており、彼らにとっても『ロクサンドラ』に描かれた帝都は「変化」によってノスタルジーを喚起させ且つノスタルジーの対象となり得るだろう。いずれの場合においても、『ロクサンドラ』を読んで昔の帝都を回想する帝都ギリシア人は帝都に対するノスタルジーの当事者であり、『ロクサンドラ』においてヨルダニドゥの「個人的ノスタルジー」の描写が、読者自身の故郷でもある場所で展開された自分自身の個人的なノスタルジーと相関する場合も十分にあるだろう。

一方で本土ギリシア人にとっては、帝都そのものはギリシア王国或いはギリシア共和国の外にある街である。帝都そのものは、ギリシア史の一部であり且つ正教と結びついてギリシア人の宗教と自己意識に甚大な影響を与えたビザンツ帝国の首都であり、失地回復運動を理論的に支えた「メガリ・イデア」の中で最終目的地とされたこともあり、「文化」と「歴史」の面で「歴史的ノスタルジー」の対象となり得る。ただし、帝都ギリシア人にとっての帝都と異なるのは、本土ギリシア人にとってこの帝都は故郷ではありえず、ヨルダニドゥの「個人的ノスタルジー」によって描かれた帝都の描写が、帝都を経験していない本土ギリシア人自身の帝都に結びつく個人的なノスタルジーと直接的に相関することはありえないであろう。

3-2-1 「歴史的ノスタルジー」の「時間的側面」

本項では、「歴史的ノスタルジー」は自分が取り入れている生活様式の連続性

が脅かされた時、換言すると、今林が定義した「不在」、「消滅」、「変貌」が生じた時、すなわち本稿で言う「変化」が起こる時に喚起されやすいという命題に基づきつつ論を進めていく。

ヨルダニドゥ自身の「個人的ノスタルジー」は故郷における不在を通して発せられたものであったが、それは、帝都で帝都ギリシア人共同体が縮小してアテネやテッサロニキといった本土の都市部へ帝都ギリシア人が集まり、本土ギリシア人の中にあって疎外を感じて生活している状況がその契機の一つであった。この点は多くの帝都ギリシア人にとっても共通の歴史的体験であり、帝都を去ってトルコ国外他の場所に定住した帝都ギリシア人にとっても、帝都に残って縮小していく共同体の中に留まった帝都ギリシア人にとっても、『ロクサンドラ』に描かれた「スタヴロドロミにはトルコ人も誰一人いなかった――ギリシア【Ρωμιοσύνη】なのだから」や「あらゆる旧い習慣が保たれていた」「タターヴラが、ギリシア人が人口の百%を占めていた帝都唯一の郊外」であった時代は既に「変貌」して「変化」していてノスタルジーの対象となる時代であり、『ロクサンドラ』で描かれる帝都は、失われた過去として帝都ギリシア人にとっての帝都へのノスタルジーへの契機となるものである。

本土ギリシア人に関しては、ギリシア史の文脈において、帝都はコンスタンディヌポリ或いはコンスタンティノープルという現代ギリシアの基礎となった中世ギリシアの中心地として文化的なノスタルジーの対象になろう。ただし、本土ギリシア人は帝都を故郷としない以上、具体的な生活と場所の記憶を持った過去の帝都そのものが彼らのノスタルジーの対象になることはなく、『ロクサンドラ』が広範な意味でのギリシア人や広範な意味でのギリシア人の街としての帝都をその小説の中心にしていない以上、帝都ギリシア人のみに限られないギリシア全体の帝都に対するノスタルジーの契機にはなることはなかろう。ただ、帝都そのものを離れた帝都ギリシア人、すなわち広範な意味でのギリシア人たちが持っていた、西欧化や近代化を経る前の世代の生活と価値観が描かれていた点は、ヨルダニドゥの『私たちの中庭』でも見られたように西欧化や近代化の中で本土ギリシア人の中でも同様に失われつつあったものであり、アンナとロクサンドラの差異を通して描かれた西欧化や近代化がもたらした「変化」は本土ギリシア人たちにとっても自分たちの過去を思い起こさせ、彼らの自分たち自身の失われた過去の生活や生き方に対するノスタルジーの契機になるのに十分であった。帝都に対する直接的な文学表象を離れたこの観点で「『歴史的ノスタルジー』は自分が取り入れている生活様式の連続性が脅かされた時、換言すると、

今林が定義した『不在』、『消滅』、『変貌』が生じた時、すなわち本稿で言う『変化』が起こる時に喚起されやすい」という命題が当てはまることになる。

そして「歴史的ノスタルジー」の観点で見た「消去的ノスタルジー」と「積極的ノスタルジー」に関しても、「個人的ノスタルジー」のところで見たように、本作においてはヨルダニドゥ自身にはよりよい未来を志向しようとする姿勢はなく「消極的ノスタルジー」に留まるものであったが、やはり『ロクサンドラ』では帝都を離れた帝都ギリシア人がどのように生きていくべきなのか、また帝都に残ったギリシア人たちがトルコにおいてマイノリティとしてどのように生きていくのか、本土ギリシア人に対してビザンツ時代を介在して彼らの過去でもあるが、故郷ではありえない帝都に対してギリシアの未来をどのように考えていけばよいのかという視点は見られない。ただし、「メガリ・イデア」やギリシア・ナショナリズムにおいて仮想敵とされるトルコ或いはトルコ人に対して、生活を共有していた過去をノスタルジーをもって描き、またギリシア人の多く住むアテネではなくトルコ人たちの住む帝都に戻ることを選択した姿は、トルコ人に対するギリシア人の歴史的嫌悪に反省を促すものであり、キプロス紛争において両者の緊張が高まり、その当のトルコ人によって圧力を加えられて帝都を離れざるを余儀なくされていたギリシア人に対して、希土関係の融和と赦し合いを提示するという点で「積極的ノスタルジー」を有していると言い得るものであろう。

しかし、世代間の差異と女性の社会での役割の観点に関しては、「個人的ノスタルジー」において「消極的ノスタルジー」に留まっていたように、「歴史的ノスタルジー」の文脈でもこの作品は「消極的ノスタルジー」に留まっていると言うほかない。それは、女性の社会進出を体現するような生き方をした著者が現実のギリシア社会における女性の社会進出の遅れを批判しているのではなく、そのロクサンドラや旧世代の生き方や今では無くなってしまったものを、アンナが祖母から「生きること、見ることと聞くことを喜ぶことも学んだ。愛することを学んだ」と表現しているように、肯定的に評価し、且つこれが執筆当時の帝都社会においても高い共感と評価を産み、また後の作品群にも「料理と帝都ギリシア人」という一つのジャンルをなし、そして本土においてドラマ化もされたように広範に高い評価を得ていることからもうかがわれる。そして現代でも使用されている外国人向けのギリシア語教材に選定されているように、家政を取り仕切り、惜しみなく家族に愛情を注ぐ、母や主婦としての役割を担ったロクサンドラの手から織りなされる業が昔のギリシアを典型的に描きだした「あたたかみ

のある」ものとして肯定的な形で受容されて理解されている。著者本人もまたこれを受容した社会も、この作品に描かれた、失われつつある帝都ギリシアの自己意識と旧社会へのノスタルジーの方を好んで評価したのであり、社会問題に対する批判の欠如が非難の対象となったり、この作品を通して展開され得る社会問題に対する批判が、人々が『ロクサンドラ』という作品に求めるものになったりすることはなかった。

3-2-2 「歴史的ノスタルジー」の「空間的側面」

「歴史的ノスタルジー」の「時間的側面」で確認したように、帝都という場所はギリシア・ビザンツ史を通して「歴史」や「文化」の面で広範なギリシア人のノスタルジーの対象となるが、とりわけ帝都ギリシア人にとってこの地は生まれ育った故郷であったり、自分の親類が生まれ育ったり、家族の墓のある故地であり、この帝都そのものが「地理的」に帝都ギリシア人のノスタルジーの契機になりうるものであり、また対象にもなりうるものであった。

既に確認しているように『ロクサンドラ』に描かれた時代の帝都は「スタヴロドロミにはトルコ人も誰一人いなかった――ギリシア【Ρωμιοσύνη】なのだから」と表現されたり、「ボスポロスのヨーロッパ側の海岸にはギリシア人と一般にヨーロッパ人が居住していた――メガ・レマ、ブユック・デレ、テラピア、これら全ての郊外はヨーロッパに似ていた。アジア側の海岸は東方【Αανατολή】であった【中略】金角湾の中にあったファナリは、未だギリシア的知性の中心であり続けていたが、初期頃の絢爛は失われていた」と表現されたりしている。加えて「あらゆる旧い習慣が保たれていた」「タターヴラは、ギリシア人が人口の百%を占めていた帝都唯一の郊外であった。あなたがトルコ人にどれほど懇願してみたところで、タターヴラに足を踏み入れようとすることもできなかっただろう」と描写されていた。このように作品には帝都ギリシア人の故郷であるという強い意識が描かれていた。著者の「個人的ノスタルジー」の箇所でも確認したように、『ロクサンドラ』の執筆当時は、実際に多くの帝都ギリシア人が故郷の帝都を離れてギリシア本土で生活し、ますます多くの帝都ギリシア人が故郷を失うかその環境の変貌に直面することを余儀なくされていた状況にあり、この故郷の喪失と変貌という「変化」が著者のノスタルジーを喚起するきっかけとなっていたわけであるが、このきっかけは著者のみではなく同じ帝都ギリシア人にもあてはまるものである。つまり「歴史的ノスタルジアは、自分が取り入れている生活様式の連続性が脅かされたときに感じやすい」という命題が、帝都ギリシア人に

とって個人的にせよ集合的にせよ当てはまっている。「故郷」としての帝都は、ロクサンドラの生き方に象徴される自分たちに固有の生き方、すなわちトルコ人や多民族と共生する暮らしと価値観が残る場所であり、「暖かい母の愛」の記憶がよみがえる場所である。帝都そのもので展開されたロクサンドラとその生き方は帝都ギリシア人たちのノスタルジーを喚起するのに十分であり、また集合的な「歴史的ノスタルジー」の対象になり得るものであろう。

同じく「歴史的ノスタルジー」の「時間的側面」で見たように、本土ギリシア人にとって帝都がナショナリズムやギリシア史における歴史的、文化的なノスタルジーの中でノスタルジーの対象となることがあり得るにして、『ロクサンドラ』が描き出した日常生活の営まれる故郷としての帝都そのものが本土ギリシア人のノスタルジーの対象になることはなく、またノスタルジーの契機になることもない。というのも、故郷として見た帝都という空間とそこで他者である帝都ギリシア人によって営まれた生活そのものは他集団のものであり、帝都における帝都ギリシア人共同体の縮小や国外への流出という帝都における変化は本質的に本土ギリシア人には自分たちのことではなく、ノスタルジーを喚起するきっかけとなる変化には該当しないが故である。ここに、帝都という空間に対する帝都ギリシア人と本土ギリシア人の差異が存ずるであろう。

だが、『ロクサンドラ』において著者の「個人的ノスタルジー」を通して描かれた、温かみを伴う、西欧化並びに近代化、或いは都市化によって失われつつあったロクサンドラの生き方と生活様式は、本土ギリシア人にとっても昔のギリシアらしい生活が失われている時代の中にあって、トルコ人や多くの他の外国人と共に共生していたという点を除いて、ギリシア的な生活様式の変化という点で本土ギリシア人にもノスタルジーの対象として当てはまり得るものであった。『ロクサンドラ』に描かれた西欧化以前の生活に見られるシマンドロや昔のギリシア料理や衣服の描写は、もちろん本土ギリシア人にとっても共通のものである。つまり、昔のギリシア的な生が営まれた空間として描かれた帝都は、本土ギリシア人にとってもその故郷ではないにしても、十分に自分たちのノスタルジーの対象になるのである。他にも、『ロクサンドラ』には第一次世界大戦以前のアテネの日常生活が帝都ギリシア人であるロクサンドラたちという他者の視線を通して描かれ、また地方出身者やアアルバニティ人[64]というギリシアにおけるマイノリティ集団も描かれることを通して、ギリシア人たちによる都市生活の中で失われて行った雑多なアテネの過去が描かれており、この点でとりわけアテネ人を中心とした本土ギリシア人のノスタルジーをも喚起し得るもので

ある。

『ロクサンドラ』におけるアテネに関する描写は、帝都ギリシア人という部外者の目をもって相対化される。地方出身者や国内の異民族マイノリティの集団に含められる帝都ギリシア人という外からの視線で描かれており、本作において展開された「外国趣味」と直接帝都を契機としないノスタルジーの結びついた描写が本土ギリシア人にも評価された要因であり、本土ギリシア人に対しても『ロクサンドラ』で描かれた個人的ノスタルジーが生活の変化という要因を通して集団的、「歴史的ノスタルジー」を喚起し得たのであった。

こうして『ロクサンドラ』に描かれた帝都とロクサンドラの生き方は、帝都ギリシア人に対して失われつつある共通の故郷と失われつつある共通の生活様式という観点で、そして本土ギリシア人に対しても、故郷ではないが昔の自分たちの生き方と生活様式を懐かしく思い起こさせるという点でノスタルジーを喚起した。そして帝都は帝都ギリシア人にとってもノスタルジーの対象として、本土ギリシア人にとっては帝都表象を通して描かれた在りし日の共通のギリシア的生がそのノスタルジーの対象となり、『ロクサンドラ』は両集団において高い評価を得るに至ったのであった。

4. 本稿のまとめ

本稿ではとりわけ『ロクサンドラ』における著者であるヨルダニドゥ個人のノスタルジーをそれぞれ「時間」と「空間」の観点から分析した。そしてヨルダニドゥを取り巻く日常生活や価値観の変化、そして帝都における帝都ギリシア人共同体の変化という二重の変化が契機となり、異なる世代における女性の社会的な位置の差を通して描かれた昔日の帝都での祖母の生き方と日常が彼女のノスタルジーの対象になっていることを「個人的ノスタルジー」の「時間的側面」において論じた。そしてとりわけこの『ロクサンドラ』を通して描かれた古い世代に属する祖母ロクサンドラの生き方が、帝都という故郷に関わる形で帝都ギリシア人に、そしてより広範な旧き良きギリシア的な生き方と生活を喚起させることを通して上記二つの異なる集団の「歴史的ノスタルジー」を喚起するにつながり、『ロクサンドラ』がギリシア文学史において評価されるに至ったということを本稿は論じた。

最後に一点、『ロクサンドラ』におけるトルコ人の表象と位置づけについて触れて本稿を閉じたい。福田（2023）で見たように、『ロクサンドラ』に描かれたトルコ人は第一類型（トルコ人をギリシア人と異質な存在であり、交わりのない

存在として描く）で見れば他者として、第二類型（トルコ人をギリシア人或いはロクサンドラと生活と習俗を共にし、交わりを有する存在しとて描く）で見れば同じ集団に属する者として表象されており、二義性を有していた。これは作中において「犬というのはもちろんトルコ人のことであったのだが、ロクサンドラにとってトルコ人はとても複雑な意味をしていた。トルコ人とは人類に対する鞭であり天罰であった。私たちがコレラ、地震、雷というようなものである。だがこういった事物がアリーや尻を追いかけていた女に逃げられてロクサンドラのもとにやって来て、バルクルの聖水を無心した卵売りのムスタファに対して何の関係があるというのだろう[65]」にうかがえる。つまり作中で描かれるトルコ人には、同じ生活様式をもって生きる隣人であったり、またアルメニア人や帝都ギリシア人に加害する人々であったりするという二面性があった。このロクサンドラの視線を通して描かれる作中のトルコ人の描写は、今林の説明を用いれば、本作に描かれるトルコ人にはノスタルジーの対象となる側面と、トラウマの対象になる側面があると言い得るだろう。今林は、記憶はある特定の時間と空間と結びついているが、記憶が呼び起こされた時、その時間と空間において起こっていたことの全てが想起されるわけではなく、肯定的なもののみが想起され、否定的なものは除去されるが故に、「ノスタルジー」は記憶を浄化する作用があり、その反対のもので除去されきれなかった否定的なものが「トラウマ」であると説明している[66]。作品の中で描かれるトルコ人への「ノスタルジー」は、肯定的な記憶に由来するものであって帝都ギリシア人の東方性において包摂される第二類型に属する側面であり、「トラウマ」は個人的にも集団的にも否定的な記憶であり、第一類型に属する他者として完全に排除される側面に含まれるものである。このように「ノスタルジー」と帝都ギリシア人の自己理解を通して、必ずしもトルコ人を仮想敵とすることのない、一般的なギリシア・ナショナリズムの類型に当てはまらないギリシア人とトルコ人像を描いた点で本作品は民族間の過去の「トラウマ」の乗り越えに対し示唆を与える点でも極めて価値のある作品である。

参考文献

一次文献

Αθανασόπουλος, Ευάγγελος, Κοκκινάκη, Ειρήνη, Μπίστα, Πολυξένη (2023) *Ιστορία της Νεοελληνική Λογοτεχνίας* -Α΄, Β΄, Γ΄ Γυμνασίου, Υπουργείο Παιδείας και

Θρησκευμάτων, Ινστιτούτο Εκπαιδευτικής Πολιτικής, Αθήνα.

Γκαρέλη, Έφη και Καπούλα, Έφη και Μοντζολή, Μάχη και Νεστοράτου, Στέλα και Πρίτση Ευαγγελία και Ρουμπής, Νίκος και Συκαρά Γεωργλια, Τσοτσορού, Αλίκη (επιμ,) (2018) *Ταξίδι στην Ελλάδα* 3 – Ελληνικά ως δεύτερη / ξένη γλώσσα – Επίπεδα Γ1 και Γ2, Εκδόσεις Γρηγόρη, Αθήνα.

Δράκου, Βίκη (2018), *Βικτωρία*, Εκδόσεις Νησίδες, Θεσσαλονίκη.

Θεοτοκάς, Γιώργος (2016) *Λεωνής*, Βιβλιοπωλείον της Εστίας, Αθήνα.

Ιορδανίδου, Μαρία (2014) *Διακοπές στον Καύκασο*, Βιβλιοπωλείον της Εστίας, Αθήνα.

Ιορδανίδου, Μαρία (2019) *Λωξάντρα*, Βιβλιοπωλείον της Εστίας, Αθήνα.

Ιορδανίδου, Μαρία (2020) *Η Αυλή μας*, Βιβλιοπωλείον της Εστίας, Αθήνα.

Μήλλας, Ηρακλής (2018) *Ο Οικογενειακός Τάφος*, Γαβριηλίδης, Αθήνα.

Μπάιλα, Τέσυ (2022) *Λέγε με Ισμαήλ*, Εκδόσεις ψυχογιός, Αθήνα.

Μπόζη, Σούλα (2019) *Η πολίτικη κουζίνα των τεσσάρων εποχών,* Εκδόσεις Πατάκη, Αθήνα.

Bozis, Sula (2020) *İstanbul'dan Anadolu'ya Rumların Yemek Kültürü*, Yapı Kredi Yayınları, İstanbul.

Millas, Herkül (2020) *Aile Mezarı*, Doğan Kitap, Kırıkkale.

Psichari, Jean (1892) *Jalousie*, Typographie Chamerot et Renouard, Paris.

Yerasimos, Marianna (2019) *İstanbullu Rum Bir Ailenin Mutfak Serüveni*, Yapı Kredi Yayınları, İstanbul.

二次文献

Αχλάδη, Ευαγγελία και Τσιλένης, Σάββας (Επιμέλεια) (2023) *Η Λογιοσύνη της Πόλης - Εκπαιδευτικοί και λογοτέχνες της σύγχρονης περιόδου*, Εταιρεία Μελέτης της καθ' ημάς Ανατολής Σισμανόγλειο Μέγαρο – Γενικό Προξενείο της Ελλάδας στην Κωνσταντινούπολη, Αθήνα,

Κυρατζόπουλος, Βασίλης (2006) *Η Άγραφη Γενοκτονία Κωνσταντινούπολη Σεπτέμβριος 1955*, Εκδόσεις Τσουκάτου, Αθήνα.

Κωσνταντινίδης, Κωνσταντίνος (2023) « Μαρία Ιορδανίου: Η Αρχόντισσα του Οικουμενικού Θρόνου », στο *Η Λογιοσύνη της Πόλης -Εκπαιδευτικοί και λογοτέχνες της σύγχρονης περιόδου*, Εταιρεία Μελέτης της καθ' ημάς Ανατολής Σισμανόγλειο Μέγαρο – Γενικό Προξενείο της Ελλάδας στην Κωνσταντινούπολη, Αθήνα, σσ. 172-177.

Ξανθοπούλου, Αιμιλία (Επιμ.) (2020) *Σύγχρονοι Κωνσταντινουπολίτες Συγγραφείς*, Νέος Κύκλος Κωνσταντινουπολιτών, Αθήνα.

浅井俊裕（1991）「「ノスタルジー」という小さな神話 :『明るい部屋』に寄せて」日本映像学会編『映像学』第四十四号、pp. 14-26, 95.

今林直樹（2018）「ノスタルジーという概念をめぐって」宮城学院大学人文社会科学研究所編『ノスタルジーとは何か』翰林書房.

大原知子（1992）「ノスタルジアと文学—その半透明のマティエールの中で—」十文字学園女子短期大学研究紀要編『十文字学園女子短期大学研究紀要』第二十三巻、pp. 33-43.

沢井理恵（1996）『私の「京城」私のソウル』草風館.

長峯聖人, 外山美樹（2019）「ノスタルジアが時間的態度に与える影響—本来性を媒介要因として—」日本教育心理学会編『教育心理学研究』第六十七巻三号、pp. 190-202.

日本心理学会監修、楠見孝編（2014）『なつかしさの心理学—思い出と感情』誠信書房.

福田耕佑（2023）「『ロクサンドラ』における帝都ギリシア人—多民族共存の街、ギリシアの街の住民たち—」日本ギリシア語ギリシア文学会編『プロピレア』第二十九号、pp. 32-57.

福田耕佑（2024）『ニコス・カザンザキス研究—ギリシア・ナショナリズムの構造と処方箋としての文学・哲学』松籟社.

---

[1] 福田, 2023, 49-50

[2] 福田, 2023, 43

[3] 福田, 2024, 78-79

[4] 福田, 2023, 47

[5] Κωνσταντινίδης, 2023, 174

[6] 十九世紀から二十世紀にかけてギリシアとフランスで活動したヤニス・プシハリスがフランス語（1892 年）とギリシア語（1891 年）で執筆した作品。「序」で本人が書いている通り、当時は文語主義者たちによって口語のギリシア語は野蛮な言語であって高等な表現ができないとされており、この主張への反駁を試みるためフランス語とギリシア語で作品を執筆し、口語ギリシア語の可能性を示そうと試みた作品である。帝都のギリシア人が主人公であってパリと帝都を舞台にしたものであるが、単なる設定としてしか機能しておらず、帝都ギリシアの自己意識に関する掘り下げ、或いはトルコ人に関する描写は無く、あくまでも帝都の中のギリシア人の街のみが舞台となっている。

[7] 帝都で生まれ育った弁護士であり、三十年世代の作家の代表の一人と見なされるヨルゴス・テオトカスが第二次世界大戦中の 1940 年に帝都で過ごした子供時代と住民交換によってアテネに到達した直後の追憶を描いた作品。

[8] オスマン帝国の首都或いはトルコ共和国内の大都市でありトルコ人が中心的な人々であって多民族にあふれる帝都において、マイノリティの帝都ギリシア人がゲットーを連想させるような、自分たちの共同体だけで生き、自分たちの言語だけで生活できたという状況は想像し難いかもしれない。だが同様の現象は、確かに置かれていた政治的、歴史的状況は異なるが、例えば第二次世界大戦前のソウルに生まれそこを故郷として暮らしていた日本人の回想を書いた『母の「京城」、私のソウル』でも描かれる。本書はこの「京城府」で育った日本人の母の記憶を中心にして娘の著者が執筆したものである。母にとっては、この京城が故郷であってむしろ引き上げ後の日本の方が外国に感じられること（沢井, 1996, 9-11）、また例えば母が通っていた南大門小学校にはほとんど日本人しかおらず（沢井, 1996, 46）、加えて京城府において日本人街を東西に貫いていた当時の本町通り（現在の忠武路、충무로）において東京銀座の「銀ぶら」にちなんで「本ぶら」を楽しんでいたように日本人共同体において日本語だけで生活していたこと（沢井, 1996, 61-62）、また周辺にいた朝鮮人に対しては、例えば引き上げの際に危害を加えられることもなくむしろ家財道具を買ってくれるなど助けてもらった記憶に見られるように好感をもっていた記憶が描かれている（沢井, 1996, 128-129）。

[9] Psichari, 1892, 5-6

[10] Θεοτοκάς, 2016, 179-180

[11] 主人公のレオニスは、子供時代は帝都で絵画を学んだ少年であった。作中において青年となり、第二十一章において難民としてアテネに来た時、アテネ人にアクロポリスがどう見えるかと尋ねられて、これが固定観念で思った白さではなく、大理石が色々な色がついて白ではなかったと答え、期待していた答えをもらえなかったアテネ人から顰蹙を買った（Θεοτοκάς, 2016, 166）。後に彼が帝都で学んだ技術である絵画をもって「アテネの素晴らしい表現であって、アテネを構成する全主題の表現になるような素晴らしい色彩の統合と単一の色調を見出して、これでキャンパスを満たして溜飲を下げようとしていた」が（Θεοτοκάς, 2016, 172）、帝都のギリシア人少年を象徴する絵画という技芸は難民として来たアテネを自分のものにする手段として適さないことを悟り、絵画を放棄することになる。このように初めは望まざる形で始まることとなったアテネでの生活を受け入れられないでいた。だが、イミトス山に登ってアッティキの平地を見渡した時に、どちらが本当の自分かはわからないが、以前の自分と今の自分がいて、以前の自分は過ぎ去ってしまい、今の自分としてギリシアで現実を受け入れて新しく生きることを決心したのだった（Θεοτοκάς, 2016, 177）。最後は、「こんな風に考えて、レオニスは新しい生活が待ち受けている街に戻ったのだった」でこの小説は終わる（Θεοτοκάς, 2016, 178）。

[12] Αιμιλία Ξανθοπούλου (επιμ.), 2020, 65-66.

[13] 『ロクサンドラ』に比べると、帝都に残った帝都ギリシア人のマイノリティとしてのトル

コ社会への統合と、ギリシアに定住し、帝都ギリシア人の自己意識を保ちつつギリシアで生き続けようとする帝都ギリシア人の意識が強く描かれている。例えば、トルコ人と結婚してギリシア人マイノリティとして生きる選択をしたキモンは、ギリシアに来たギリシア人たちが結局帝都にいた頃のように統合を拒んで社会の部外者としてゲットーをつくり半ばトルコ人と遇されていること、そして帝都に残った帝都ギリシア人も結局は自分たちが部外者でいるために帝都ギリシア人であり続けようとして統合を拒んでいると語っている（Μήλλας, 2018, 188-189 και Millas, 2020, 163-164）。また、物語の始まりから結部にまで、トルコ人の男性と帝都ギリシア人女性の恋愛を通してギリシアとトルコの関係についての壁と融和についても描かれている。

[14] 『家族の墓』の作中において「間の悪いロシア人二人組に会ってしまって、あいつらのせいなんだよ！」の台詞の箇所で登場しているが、ギリシア語版では Κακό χρόνο να ’χουν οι δύο Ρώσοι, αυτοί έγιναν αιταία であり（Μήλλας, 2018, 176）、トルコ語版では O iki Rus’ un Allah belasını versin! Onlar sebep oldu! と書かれている（Millas, 2020, 152）。ギリシア語版で「間の悪い」とした Κακό χρόνο να ’χουν はロクサンドラの口癖であった。

[15] Ιορδανίδου, 2019, 9

[16] 福田, 2023, 37-38

[17] 中等教育における現代ギリシア文学史の教科書においては、主人公たちの街での日常生活が描かれているという面に強調が置かれている（Αθανασόπουλος,κτλ, 2023, 155）。

[18] 今林, 2018, 13

[19] 宮城学院大学人文社会科学研究所, 2018, 5

[20] 今林, 2018, 13-16

[21] 今林, 2018, 13-15

[22] 日本心理学会, 2014, 43：社会学者のフレッド・デーヴィスは現代社会においては人々の移動が頻繁であるため、場所への愛着は弱く、ノスタルジアの意味が望郷から過去への思いに変わったとしている。今林が指摘しているように、帝都という失われた故郷が自己意識形成に重要な役割を果たす『ロクサンドラ』においては、故郷の有するノスタルジーの「空間」性は極めて重要な役割を持っており、本稿でもノスタルジーにおける「故郷」の重要性を強く認める。

[23] それぞれごく簡単に挙げられている例を整理すると、「地理的空間」は山とか自然とか都市景観、「歴史的空間」は万博やオリンピックの場所が当時の記憶を思い起こさせるような空間、そして「文化的空間」は特定の空間が特定の文化に結びついているコリアタウンなどとされる（今林, 2018, 16）。

[24] 今林, 2018, 16-17：それぞれごく短くまとめると「不在」は現時点でノスタルジーを感じる場所にいないこと、「消滅」はノスタルジーの契機と対象となるものが消えてしまったということ、「変貌」はある特定の空間が現時点でも存在しているが様相が大きくかわったこととしてまとめられる。

[25] 日本心理学会, 2014, 6-7, 24

[26] 記憶の観点から捉えると「個人的ノスタルジー」と「歴史的ノスタルジー」の差異は明白で、前者がエピソード記憶に基づき、後者は歴史にかんする「意味記憶」（外的な事象、言葉、概念に関する知識）に基づいて形成される（日本心理学会, 2014, 50）

[27] 日本心理学会, 2014, 58

[28] 日本心理学会, 2014, 59-60

[29] 今林は、契機を意図せずして自然に得られる「自発的ノスタルジー」と他者からの働きかけによって得られる「操作的ノスタルジー」という区分を設けたが、この区分を用いての『ロクサンドラ』の分析は、当時のギリシア国内の政治状況やイスタンブルのギリシア人共同体が置かれていた状況を加味し、メディアでの扱いと社会状況を照らし合わせた文学テキストを分析する以上の研究が必要であり、稿を改めて論じることとしたい。

[30] ドラクによると、第一次世界大戦期にはオスマン帝国の少数派に対して、また 1920 年代前半には時にギリシア系に対して行われた地方での強制労働である Amele Taburu（Τάγμα Εργασίας/ 労働大隊）が行われた（Δράκου, 2018, 145）。こういった少数派に対する強制労働への徴集に関して、この一九二一年の時の記録はイリアス・ヴェネジスの自伝的小説『囚人番号三一三二八番』に描かれている。

[31] βαρλίκι：トルコ語ではヴァルルック・ヴェルゲシ（Varlık Vergesi）。第二世界大戦中の一九四二年にトルコが第二世界大戦に巻き込まれる場合に備えて課された税であるが、実際にはギリシア人やアルメニア人、またユダヤ人などの非ムスリムの少数派に対する経済的な弾圧だったにつながったと理解されている。

[32] Σεπτεμβριανά：一九五五年九月五日、六日にかけて起こった帝都ギリシア人に対する弾圧或いは暴動。ヴァシリス・キラジョプロスの『書かれていない虐殺―― 一九五五年九月コンスタンディヌポリ』などの研究が指摘しているように、長らくギリシアでは十分に触れられなかった出来事であったが、近年では 2022 年に出版されたテッシー・バイラの『僕のことはイスマイルと呼んで』に見られるように、この出来事を物語の中心として描く文学作品も見られるようになった。

[33] Ιορδανίδου, 2019, 11

[34] Ιορδανίδου, 2020, 45

[35] Ibid.

[36] Ιορδανίδου, 2020, 11

[37] Ιορδανίδου, 2020, 12

[38] Ιορδανίδου, 2019, 118

[39] 福田, 2023, 47

[40] Ιορδανίδου, 2019, 217 et 福田, 2023, 50

[41] Ιορδανίδου, 2019, 241

[42] Ιορδανίδου, 2019, 86-87

[43] Γκαρέλη, κτλ ,2018, 112

[44] 帝都ギリシア人共同体に起源をもつ、アテネに移住して帝都や小アジアのギリシア料理

と関連する習俗の執筆を行っているスラ・ボジがギリシア語で書いた『四季節ごとの帝都料理』（Η Πολίτικη κουζίνα των τεσσάρων εποχών）やトルコ語で書いた『イスタンブルからアナドルへ、帝都ギリシア人たちの料理文化』（İstanbul'dan Anadolu'ya Rumların Yemek Kültürü）などの作品が挙げられる。帝都ギリシア人料理と個人史や家族史を主題にした重要な著作に、二〇二四年現在も帝都に居住する帝都ギリシア人のマリアンナ・イェラシモスの『あるイスタンブルギリシア人家族の料理の冒険』（İstanbullu Rum Bir Ailenin Mutfak Serüveni）がこのジャンルの典型的な作品として挙げられる。帝都や小アジアの料理と関連する習俗は二〇二四年現在も続く一種の帝都ギリシア人に関する重要なテーマの一つであり続けている。

[45] Ιορδανίδου, 2019, 71-73

[46] Ιορδανίδου, 2019, 236-237

[47] Κωσνταντινίδης, 2023, 173

[48] Ιορδανίδου, 2014, 78

[49] Ιορδανίδου, 2019, 242-243

[50] Ιορδανίδου, 2019, 243-244

[51] Ιορδανίδου, 2019, 216

[52] Ιορδανίδου, 2019, 77

[53] Ιορδανίδου, 2019, 78

[54] Ιορδανίδου, 2019, 79

[55] 帝都新市街地のペラ或いはベイオールを指す。

[56] Ιορδανίδου, 2019, 18-19

[57] Ιορδανίδου, 2019, 37：なお『私たちの中庭』において、ヨルダニドゥは子供時代にタターヴラに住んでいたおばのカリオピチャを訪れたエピソードを記している。そして、この家がどのような家だったのかを細かく描写している（Ιορδανίδου, 2020, 47-48）。

[58] Ιορδανίδου, 2019, 37

[59] Ιορδανίδου, 2019, 58-59

[60] Ιορδανίδου, 2020, 47-48

[61] Ιορδανίδου, 2020, 54

[62] Ιορδανίδου, 2020, 12

[63] Ιορδανίδου, 2020, 60

[64] ギリシアのイピロス地方やアッティキ地方に居住する、アルバニア語に近縁のアアルヴァニティック語を話す人々。

[65] Ιορδανίδου, 2019, 46

[66] 今林, 2018, 20